様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 ２６ 日現在

機関番号：２３６０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2022
課題番号：１９Ｋ００００１２

研究課題名（和文）精神障碍者の地域定着のための対話技法の開発：精神医療倫理の基礎研究として

研究課題名（英文）Development of Dialogue Techniques for Community Settlement of the Mentally Challenged: As a Basic Study of Mental Health Ethics

研究代表者
屋良　朝彦（YARA, Tomohiko）

長野県看護大学・看護学部・准教授

研究者番号：９０４５７９０３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,700,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究の目的は、精神障碍者の地域定着事業を推進するために、紛争解決のための対話技法と精神療法であるオープン・ダイアローグを組み合わせた対話技法を開発し、精神障碍者の地域定着を促進するための対話モデルを構築することである。
　結果として、上述の対話モデルを活用し、精神障碍者のピアサポートグループ（「ピア南信　しあわせの種」）を組織し、市民との交流会や看護大学や看護専門学校での講義、学会でのシンポジウム開催などの活動を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義
精神障碍者を「脱病院化」し、地域定着を進めるのは喫緊の課題である。しかし、現状はほとんど進んでいない。これは、地域住民だけでなく、医療関係者自身がトラブルを恐れているためだと考えられる（現状は入院中心医療である）。本研究の目的は、この問題を解決するべく、紛争解決のための対話技法と精神療法であるオープン・ダイアローグを組み合わせた対話技法を開発し、精神障碍者の地域定着を促進する対話モデルを構築することであった。
結果として、この対話モデルを活用することによってピアサポートグループを組織し、運営することができた。これは、社会的意義だけではなく、応用倫理学をより実践的にするという学術的意義を有する。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to develop a dialogue technique that combines the dialogue technique for conflict resolution and open dialogue, a psychotherapeutic method, in order to promote the project of community settlement of the mentally challenged, and to construct a dialogue model to promote community settlement of the mentally challenged.
　As a result, utilizing the dialogue model described above, we organized a peer support group for the mentally challenged ("Peer Nanshin Shiawase no Tane") and conducted activities such as exchange meetings with citizens, lectures at nursing colleges and nursing schools, and holding symposiums at academic conferences.

研究分野：医療福祉倫理

キーワード：応用倫理　精神障害　コミュニケーション　対話　ピアサポート

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

2004 年以来、日本の精神保健福祉行政は「入院中心から地域生活中心」に方針が転換され、精神障碍者の地域定着事業が推進されている。また、2014 年には国連障碍者権利条約が批准された。しかし、国の施策は進んでいない。2022 年 9 月 9 日に提出された同条約の対日審査総括所見においては､障碍者の強制入院や身体拘束等の人権問題に関する｢父権主義的なアプローチ｣に対して大きな懸念が示された（United Nations Human Rights Treaty Bodies, 2022）。

勿論、厚生労働省も無策ではなく、2017 年より「精神障碍者に対応した地域包括ケアシステム」の再構築を打ち出している。そこで特に注目されているのは、障碍者当事者とその家族、地域の人々との互助･自助活動を促進するものとしてのピアサポート活動である (厚生労働省,2015)。しかし、その動きに対して、患者家族や近隣住人だけではなく、医療者自身からの懸念も多く、入院中心医療を望む声も依然として強い。

２．研究の目的

本研究の目的は 2 点ある。第 1 に、ピアサポート活動の有効性を実証するために、それを円滑に運営するためのコミュニケーション・モデルを開発することである。研究代表者屋良はすでに、人々の紛争解決のためのコミュニケーション・モデルを開発している(屋良,2009: yara2011: yara2014)。本研究では、それを、近年対話を中心とした精神療法として注目されているオープン・ダイアローグという対話技法と融合させて、新たなコミュニケーション・モデルを開発することであった。

第 2 の目的は、そこで開発したモデルを実際に活用して、ピアサポート・グループを組織し運営することによって、このモデルの有効性を検証することである。

３．研究の方法

第１に、紛争解決のための対話技法(Conflict Resolution および合意形成論)と、近年注目されている対話を中心とした精神療法であるオープン・ダイアローグの両者を取り入れた新たなコミュニケーション・モデルを構築することである

第２に、ここで開発されたコミュニケーション・モデルをもとに、実際にピアサポート・グループを組織し、運営していくことによって、その有効性を検証することである。

４．研究成果

第１に、紛争解決の対話技法とオープン・ダイアローグを融合させた新たなコミュニケーション・モデルを構築し、学術論文として発表した(yara, 2019)。第 2 に、それを基に、ピアサポート・グループを立ち上げた。

後者に関して、具体的には、研究代表者屋良と研究分担者星は、数名の有志と2019年にピアサポート・グループ「ピア南信しあわせの種」を立ち上げ、ウェブサイトの運営および毎月の定例会および地域との交流会や勉強会、学会などでの講演会やシンポジウムなどを開催した（ピア南信しあわせの種,2022）。例えば、2022年8月9日には主要メンバー5名でThe 20th International Council of Philosophical Inquiry with Children (ICPIC：子供の哲学　国際学会)において“Mental Health of Children with Troubles and Peer Support”というタイトルでシンポジウムを開催した（ICPC,2022）。また、同年12月17日には「日本こころの安全とケア学会第５回学術集会」において「ピアサポートと地域おこしの共同実践～ 精神障がい者が自分らしく生きていくための地域づくり「チームピアサポ」モデルの実現に向けて～」という演題の招待シンポジウムを開催した（こころの安全とケア学会,2022)。この成果は、近年出版予定である。

〈引用文献〉

ICPIC (2022): International Council of Philosophical Inquiry with Children (ICPIC)　HP
https://icpictokyo.jp/

厚生労働省(2015)：精神障害者に対する支援について.
https://www.google.com/url?sa=t&rct=j&q=&esrc=s&source=web&cd=&cad=rja&uact=8&ved=2ahUKEwikjonisLH6AhUSxosBHWirD-IQFnoECCYQAQ&url=https%3A%2F%2Fwww.mhlw.go.jp%2Ffile%2F05-Shingikai-12601000-Seisakutoukatsukan-Sanjikanshitsu_Shakaihoshoutantou%2F0000098140.pdf&usg=AOvVaw1KD2NFTk0KU1LR_AA-bMqH

こころの安全とケア学会(2022)：「日本こころの安全とケア学会第５回学術集会」HP
https://www.jascmh.com/meeting

ピア南信しあわせの種（2022）：ピア南信しあわせの種　HP　https://peertane.jimdofree.com/

United Nations Human Rights Treaty Bodies (2022):
https://tbinternet.ohchr.org/_layouts/15/treatybodyexternal/Download.aspx?symbolno=CRPD%2fC%2fJPN%2fCO%2f1&Lang=en

屋良朝彦(2009):チーム医療における不確実なリスクに対する集団的意思決定、日本医学哲学倫理学会『医学哲学 医学倫理』第 27 号 41-51 頁。

YARA, T., (2011): Uncertain Risks and Consensus Building: The HIV Crisis as a Case Study. Journal of Philosophy and Ethics in Health Care and Medicine, No. 5.

YARA, T., (2014): Decision Making Models for Multidisciplinary Health Care Teams: From Informed Consent to Conflict Resolution. Bulletin Nagano College of Nursing, 25-34.

屋良朝彦 (2019): 多声性と祝祭性 精神障碍者と地域の対話に関する哲学的考察. 医学哲学医学倫理, 34-44.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計6件（うち査読付論文　6件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 KANEMITSU Hidekazu	４．巻 69
２．論文標題 New Developments of Engineering Ethics Education:	５．発行年 2021年
３．雑誌名 Journal of JSEE	６．最初と最後の頁 5_31～5_37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.4307/jsee.69.5_31	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 井村俊義	４．巻 24
２．論文標題 ワトソンとナイチンゲールの看護観における詩と死生観に関する考察	５．発行年 2022年
３．雑誌名 長野県看護大学紀要	６．最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 星幸江	４．巻 17（1）
２．論文標題 長期入院統合失調症患者の退院時期を見定める看護師の臨床判断の影響要因	５．発行年 2021年
３．雑誌名 北海道医療大学看護福祉学部学会誌	６．最初と最後の頁 35-42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 星幸江	４．巻 １７（1）
２．論文標題 長期入院統合失調症患者の退院時期を見定める看護師の臨床判断の影響要因	５．発行年 2021年
３．雑誌名 北海道医療大学看護福祉学部学会誌	６．最初と最後の頁 35-42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 松本大理	4．巻 21
2．論文標題 『人倫の形而上学の基礎づけ』における二つの立場	5．発行年 2020年
3．雑誌名 日本カント研究	6．最初と最後の頁 37-47
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 屋良朝彦	4．巻 37
2．論文標題 多声性と祝祭性　―精神障碍者と地域の対話に関する哲学的考察	5．発行年 2019年
3．雑誌名 医学哲学　医学倫理	6．最初と最後の頁 34-44
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 金光秀和
2．発表標題 AIの倫理学という問題圏（シンポジウム「AIの倫理学―その問題圏の検討」）
3．学会等名 北海道哲学会
4．発表年 2021年

1．発表者名 金光秀和
2．発表標題 金沢工業大学における修学に関する学習支援について―初年次教育を中心として―
3．学会等名 日本リメディアル教育学会第15回全国大会
4．発表年 2019年

１．発表者名 松本大理
２．発表標題 『道徳形而上学の基礎づけ』における二つの立場
３．学会等名 日本カント協 会（第44回学会）
４．発表年 2019年

〔図書〕　計1件

１．著者名 井村俊義	４．発行年 2019年
２．出版社 コトニ社	５．総ページ数 264
３．書名 超看護のすすめ	

〔産業財産権〕

〔その他〕

長野県看護大学　講座案内　哲学・倫理学
https://www.nagano-nurs.ac.jp/gaiyou/kouza-professor/a_yara.html
未知なるものへの倫理
http://tomoyara.web.fc2.com/
ブログ：未知なるものへの倫理
http://philo-ethica.cocolog-nifty.com/blog/
未知なるものへの倫理
http://tomoyara.web.fc2.com/
ブログ：未知なるものへの倫理
http://philo-ethica.cocolog-nifty.com/blog/
長野県看護大学　講座案内　哲学・倫理学
https://www.nagano-nurs.ac.jp/gaiyou/kouza-professor/a_yara.html

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	井村　俊義 (Imura Toshiyoshi) (00647943)	長野県看護大学・看護学部・准教授 (23601)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	松本　大理 (Matsumoto Dairi) (20634231)	山形大学・地域教育文化学部・准教授 (11501)	
研究分担者	本田　康二郎 (Honda Kojiro) (40410302)	金沢医科大学・一般教育機構・准教授 (33303)	
研究分担者	金光　秀和 (Kanemitsu Hidekazu) (50398989)	金沢工業大学・基礎教育部・教授 (33302)	
研究分担者	星　幸江 (Hoshi Sachie) (90634626)	長野県看護大学・看護学部・助教 (23601)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計1件

国際研究集会	開催年
The 20th International Council of Philosophical Inquiry with Children	2021年～2021年

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関